



# いわいしま通信

## 夏の賑わい

4年ぶりに新型コロナの規制がない夏を迎えて、祝島も帰省客や釣り客、観光客で賑わいました。盆踊りも4年ぶりに開催され、久しぶりの故郷を堪能された方も多かったことでしょう。定期船も乗客が多い日には、乗りきれなくて、室津まで2往復することも何度かありました。賑わいのある港の雰囲気は、やはりいいですね。



定期船から降りてくるたくさんの帰省客



4年ぶりに組み立てられた盆山



海水浴を楽しむ帰省した子どもたち



島へ帰る人、街へ帰る人

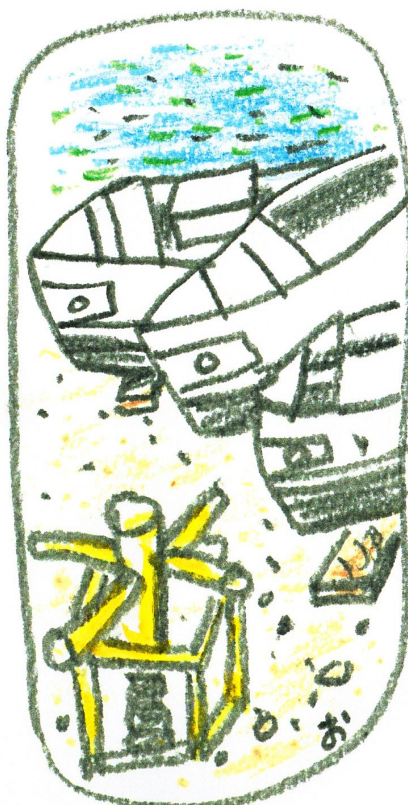
## 神舞の開催が決定しました

来年の神舞神事の開催が決定しました。4年に一度開催される神舞神事、前はコロナ禍のために中止になってしまいましたので、8年ぶりの開催になります。今から楽しみですね。

ただ、高齢化、人口減少、そして夏の酷暑の影響などを考慮し、日程等は再検討することになっており、現時点では未定です。



目次	
夏の賑わい	1
神舞開催決定	1
祝島・記憶の玉手箱	2
会員リレーコラム	4
飛島視察旅行記	6
山田イサオ写真館	7
絵つき一覧覧会	6
千客万来	8
絵つき一覧覧会	9
祝島旅行記	10
祝島自由律俳句	11
お知らせ&募集	12
編集後記	12



「祝島物語」 画・大井しげる



## <連載> 祝島・記憶の玉手箱(31)

## ～ 石にまつわるお話 ～

語り部:ちーちゃん

島のお年寄りに、毎回違うテーマで昔の祝島の様子を話していただく「祝島・記憶の玉手箱」シリーズ。今回は、現在祝島に住んでいるお年寄りで最高齢のちーちゃん(98歳)に、いろいろな石にまつわるお話を聞かせていただきました。

司会: やっと涼しくなってきましたが、今年の夏は暑かったですねえ。

ちーちゃん: 毎年ぬくう(暑く)なりようねえ。

司会: それから7月の始めに大雨が降って、あちこちが崩れたけど、お墓の下が崩れたのは、びっくりしました。今まで、こんなことはあったんですか？

ちーちゃん: だいぶん前の話じゃがねえ、ナゴオのクボがくえて(崩れて)から、この辺の土地が出来たんちゅうで。

司会: ナゴオ言うのは長尾のこと？

ちーちゃん: そうそう。ほいで、窪うじょるけえナゴオのクボ言うのいのた。

司会: それは、どのあたりになるんですか？

ちーちゃん: 学校よりまだ上の、東の墓の上をって峠へ行く道があらう。横見山をってのぞきに出よう・・・。

司会: あの曲がり角のところに、谷みたいになってるところがありますよね。あそこですか？

ちーちゃん: そうそう。そのナゴオの谷がくえて、その下地の方に「寺の門」言う地名があらうがね。昔はそこに善徳寺の寺があったんといね。そいでねえ、そこが寺じゃけえ、墓もあったのいねえ。ほいじゃが、その頃の墓いうのは、みな石を積んじょったんじゃけえね。ゴーリン石ゆうて言おう。それが皆流されて、あの浜根らあの沖から、今の木下のあたりの沖に、皆くえ出たんと。



今年7月初めに、東のお墓の下の斜面でがけ崩れがあり、一番下の段のお墓も流された。

司会: そしたら、今の民宿くにひろの辺りを土砂が流れたということですか？

ちーちゃん: それといで。

司会: えーっ、それはいつ頃の話ですか？

ちーちゃん: 明治の前じゃろうねえ。明治の初めか、その前は何言うんじゃったかねえ。

司会: 明治の前は、江戸時代だから、慶応とか・・・

ちーちゃん: なんか知らんが、その頃じゃろう。あんたとこ(民宿)の上も谷じゃったんじゃけえねえ。ナゴウの谷の方からずっと下がってきて、あんたとこと寺(今の善徳寺)の間の谷ができたんといね。

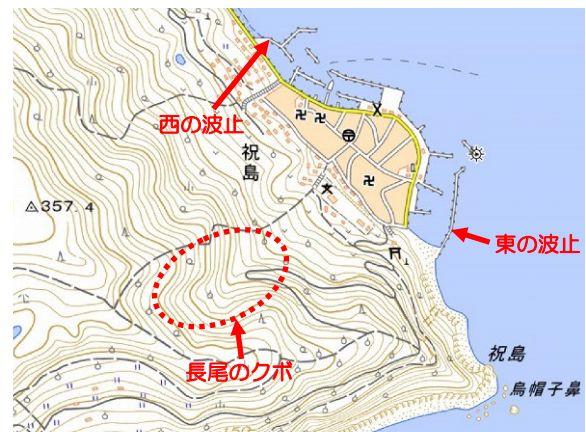
司会: ヒラギのことですか？今は道だけど、昔は谷だったそうですね。この辺りはその時にできたってことですか？

ちーちゃん: そういこといねえ。そいじゃけえねえ。その頃にねえ、一番海に近あのは、平じゃったんといね。

司会: 平萬次さんのところですか？そこから下は海だったということですか？

ちーちゃん: そうそう。海いうか、この周りゃあ、そいじゃけえ浜じゃったのいねえ。それから、この辺りに家が増えてきてから、井戸をそれぞれに掘りだあたらう。そいたら、貝殻やら何やら出るんと。國弘の井戸も掘ったなあ明治時代じゃろう。その頃から家が(浜の方に)下がって建っていったんと。

司会: なるほど。山が崩れてこの辺りに土地ができた



祝島の地形図

から、この東方に家が増えたんですね。

**ちーちゃん：**そうそう。

**司会：**西方や中郷の方は、その前から家があったということですね？

**ちーちゃん：**そういうことだね。ほいじゃけえ、この沖だけじゃあねえ、土地が海にこう突き出ちよるの

**司会：**そうですね。

**ちーちゃん：**わしが知りだしてから（物心ついてから）じゃたらねえ・・・東の波止があろう。もともとは石が積んであろう。ありゃあ瀬の上に積んじやるんよ。「中ばえ」いうてねえ、ずーっと瀬じゃったんよ。そこに行っちゃーねえ、二ナを獲ったり、アオサを採ったり、ひじきやろ、ふのりやろ採ったりせよったんよ。

**司会：**えー！そしたらあの東の波止は、ちーちゃんが生まれてから出来たということですね。意外と新しい、とは言っても、ちーちゃんは98歳、かれこれ100年前の話になるんですね。

**ちーちゃん：**あっはっは。あの波止を造るのに、あっちこちの石を持ってきちゃあ石を積んだんよね。「翁様（翁石）」があろうがね、



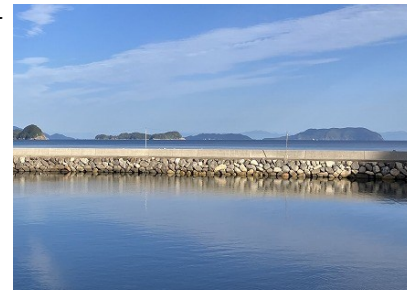
翁石

「チョンギー首」言う人もおるが・・・あの手前の方にねえ、大けな、ええ石があったの。それが、櫓が載せてあった「櫓石」いうの。ありゃあねえ、今の宮島の社（やしろ）を建てる時、候補が三所（みどころ）あって、巖島と祝島と、もう1つ忘れたがね（平郡島にもその言い伝えがある）視察に来たんと。祝島も土地が狭かろうがね、社を建てるのに、長さを測ってみたら、ちーっと足りんじゃったんと。それで、帰り際に土産にいうて、記念の櫓をその大けな石の上に置いて帰ったんといね。ありゃあ、ええ石じゃったんで、櫓がこう置いてあってねえ。

**司会：**へー！ そんないわれがあったんですね。

**ちーちゃん：**話は戻るが、東の波止を積む石が無あようになったいうて、その大けな立派な櫓石を使う言うて、ローブをかけて引っ張るのに、どうしても動か

だったんと。3回も4回もせても、ローブが切れてねえ。それでとうとう割ったんと。その頃じゃけえ、黒瀬いう波止組さあじゃった。長門の方の黒瀬組。その石を割ったけえかどう



東の波止

か知らんが、人が死んだりせたんよ。

**司会：**そうですね。そしたら、東の波止を造ったのは、昭和になってから？

**ちーちゃん：**そうそう、昭和の初めの頃じゃった。

**司会：**西の波止は、その頃にはもうあったんですか？

**ちーちゃん：**ああ、磯崎の前の波止は早うからあったの。あがいに長あ波止じゃあなあんじゃが、短かあ波止が元々あったの。それからずーっと、他にもいっばい波止ができたのは終戦後じゃけえね。

**司会：**東の波止から西の波止まで、ずーっと浜だったということは、相当広がったんですね。

**ちーちゃん：**広がったよ。そして、すいさんか（忠魂碑のある場所）から、えべす（商店）の沖までが、こお突き出ちよったのいねえ。

**司会：**それにしても、ちーちゃんは、生まれる前のこともよく知ってるけど、古い話は、誰に聞いたんですか？

**ちーちゃん：**灘波のねえ、浜根のおばあさんらあの親。わしのひいばあさん。

**司会：**ちーちゃんからみて、ひいおばあちゃんとかですか？ すごい昔ですね・・・あはは。今日は貴重なお話、ありがとうございました。



戦後、間もない頃の祝島。手前が西の波止。



このコーナーは「祝島ネット21」の会員の皆さんに、自己紹介を兼ねて簡単なコラムを書いていただくコーナーです。今回は、亡くなられたご主人の孝典さんの後を継いで、祝島ネット21の会員になられた、松岡真理子さんです。



松岡真理子さん。ご主人の孝典さんと

この度このコラムを書かせて頂くことになりました、東京都町田市在住の松岡真理子と申します。来月10月にめでたく？後期高齢者の仲間入りを果たす者です。今年8月19日より親族11名で民宿くにひろ様に二泊させて頂き、大変お世話になりました。その折ご夫妻より寄稿のお話を頂きました。実は主人孝典が生前、2013年「第43号」に掲載させて頂き、夫婦で10年ぶり2回目の登場となります。主人の父方の先祖が祝島出身で新婚時代に墓参りに訪れて以来、2012年の神舞見物も含めて今回で6回目の訪問となりました。

今夏の旅は主人の次姉（94歳）のたつての希望で実現したもので、親族が大勢集まったの来島は25年ぶり。25年前の時も10名ほどで、一番上の姉（現在99歳）が自分史を出版した記念の旅行でした。主人の兄や姉も若く、墓参りをした後、皆で元気に山に登り、行者様に参拝した写真が残っています。

「第43号」に主人が書いてありますが、行者堂は曾祖父 甚六が江戸時代に高野山で入魂して行者祠を建立して以来、島の方々のご協力のもと、祖父 豊

蔵、父 甚六がお堂や鳥居を奉納、修理などを行っていました。また甚太さんや主人の兄は毎年高野山詣りをしていたそうで、信心深い家族であったと聞いています。今回は若手の数名が行者堂まで登ったのですが、私はと言うと、普段車ばかりで足が弱りこのままでは行者堂にとても登れないと、旅行の1ヶ月前より急遽早朝ウォーキングを始めたのですが、結局はその前に孫達と海で遊び過ぎて疲れ、断念してしまいました。以前参拝した時には、お堂の前に立つと先祖の思いが伝わって来るようで、思いも新たに清々しい気持ちで山を下りた記憶があります。次回には是非体力を付けてリベンジしたいと思っております。主人は2019年秋に亡くなりましたが、この旅に参加できていたら、どんなに喜んだらうかと思ひます。きっと一緒に私達の誰よりも楽しんでいただいていたと思ひます。また生前より橋部様はじめ島の方々には大変お世話になり、私も年末の注連縄作りなどの面白いお話を橋部様より電話で伺って、祝島を身近に感じさせて頂いて来ましたが、今回実際にお会い出来、また昔の詳しいお話を聞いたのは大変嬉しい出来事でした。

また江戸時代より松岡家は船による塩の運送業を営んでいましたが、明治32年ごろ祖父豊蔵が下松で酒造業をはじめ、その後釜山に家族で渡って以降、終戦で引き上げて来るまで酒造りを続けたそうです。2014年に息子夫婦が祝島を訪れた際、國弘さんから木製の看板を渡して頂きました。下松時代のもので遠縁にあたる岡部さんの家から見つかったそうです。そしてその看板を息子達が大事に抱えて東京に持ち帰りました。縦91×横23.5×厚み2cmの1枚板に墨で「酒類製造場」、裏に下松の住所と「製造主 松岡豊



家宝になった「酒類製造場」の看板

蔵」と書かれた堂々たるものでした。これを見た主人は「100年以上の前の松岡家のルーツだ」といたく感激して、以来家宝の様に大事にしておりました。今は息子の家で大切に保管されています。

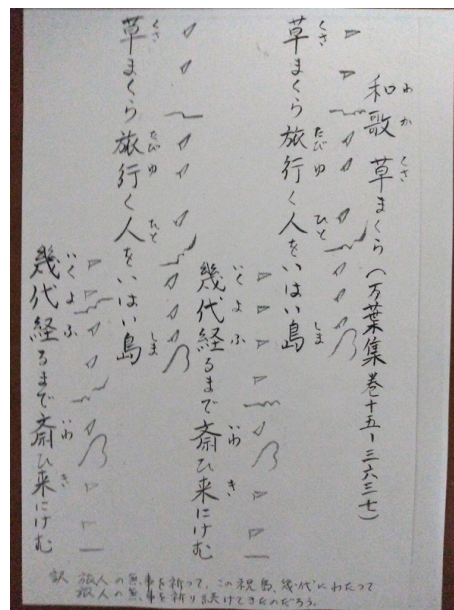
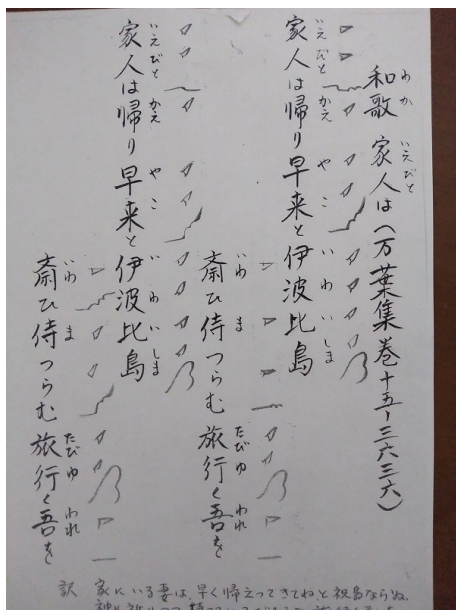
一つ面白いエピソードがあるのですが、2013年8月に主人と墓参りのため、くにひろさんに泊めて頂いた折、夕食時に一人の島根から来た牧師さんと出会いました。小中学校時代、東京大田区に住んでいた私は家の近所の小さな教会に通っていましたが、その事を話したところ、その方はなんと、その教会を知っている、牧師さんに会ったこともある、と仰るではありませんか！ 東京から遠く離れた山口県の祝島でその様な人と出会うとは何という奇遇！！ 本当にびっくりして、家に帰ってからもう何十年も会っていない当時の教会の友達に葉書で知らせました。すると直ぐ返事が来て、もう一人の仲間と3人で食事をする事になり、その年の11月に実に50年ぶりに再会する事ができました。それ以来、年に1、2度、食事をしたり日帰り旅行をしたりと楽しく交流を続けております。

この話にはもう一つ続きがあります。再会した友人が長く詩吟を習っていると聞いて、私も興味を持つようになり、去年近くの詩吟教室に入会して通うようになりました。たまたま今夏の旅行前、奥の細道の俳句

に節調を付した詩吟の練習の時、急に思い付いて川添吟照先生に祝島の歌碑に刻まれた万葉集の二首にも節を付けて頂けないかお願いしたところ快諾して頂き、翌週の練習日に先生の模範吟詠と生徒みなで吟じたものを録音。そしてそれを民宿くにひろさんでの最初の晩の乾杯のあと皆に披露する事ができました。祝島が万葉の時代より船の安全を願った人々の祈りの地であった事が少し実感できたような気がして、いい思い出となりました。

今回の旅行では心配していた台風にも遭わず、ずっと晴天に恵まれ、静かで美しい浜辺と広く澄んだ青空が特に印象的でした。いつか静かな浜辺に座って、また山の中腹で海を眺めながら、趣味で習っているアイリッシュハーブの優しい音を気持ちよく響かせられたらと、一人想い描いたりしています。

今は親戚の者も離れて暮らし高齢となりましたが、みな祝島を心の拠り所として大切に思っています。私もこれから出来るだけ機会をつくって訪問し、祝島との繋がりを大事にして行きたいと思っております。どこかで会員の皆様とお会いする事もあるかと思いますが、その節はどうぞ宜しくお願い致します。



祝島を詠んだ万葉集の二首を詩吟で披露しました



7月1日～2日にかけて、山形県酒田市の飛島に視察旅行に行ってきましたので、その報告をさせていただきます。全国離島振興推進員連絡委員会（略称：全推連）では、年に2回程、全国の離島のどこかで理事会と交流・視察研修を行っており、私も理事の一人として、今回の飛島での行事に参加しました。飛島には、東京でのイベント「アイランダー」で知り合っ、祝島にも来てくれた若者たちがいるので、彼らに会いたいと、妻も同行しました。

まずは、飛島の紹介をしましょう。飛島は山形県酒田市の39km沖の日本海に浮かぶ山形県唯一の有人離島です。島の周囲は約12kmですから、祝島とほとんど同じです。でも、平均標高が約50mの平坦な台地状の島で、最高標高も68mしかありません。

島に行くには、酒田港から定期船「とびしま」で片道約1時間15分かかります。平日は1日1往復ですが、土日祝日、ゴールデンウィーク、夏休みなどは1日2往復になります。オフシーズンの10月～3月は全て1日1往復になります。本土から飛島に行く場合は、約3時間滞在で日帰りができますが、逆に島から本土へは、平日は日帰りできません。（2往復の日でも本土での滞在時間は1時間弱になります。）

現在の人口は約160名。やはりここも過疎高齢化が進んでいる島です。しかし一方で、UターンやIターンで移住して来た若者たちが、「合同会社とびしま」を設立して、頑張っている島でもあります。

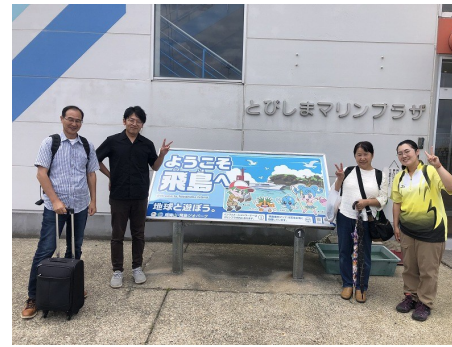
さて、7月1日の朝9：30発の飛島行き定期船に乗るため、全推連御一行、約15名が酒田港に着くと、待合所は乗船するお客さんで賑わっていました。聞くところによると、時化のために2～3日ほど欠航が続いて、この日は久しぶりに運航されるとのこと。運が良かった・・・と思ったのも束の間、船が港の外に出ると日本海はまだ荒れており、船は大揺れで、



定期船とびしまの船内

かなり気持ちが悪くなりました。

なんとか飛島に到着し、酒田市の職員案内でとびしま総合センターに行き、



松本さん・小川さんと再会

まずは全推連の理事会が開催されました。昼食を食べた後、2グループに分かれて島巡り。私たちのグループは、先に遊覧船（漁

船）で島を一周、その後、今度は島内をガイドさんと一緒に散策しました。午前中まだ荒れていた海は凪いだのかと心配でしたが、その心配は的中し、船は揺れまくり、飛沫も容赦なく飛んできて、修行のような1時間でした。島内散策のガイドをしてくれたのは、以前祝島にも来てくれた小川ひかりさん。合同会社とびしまの社員で、とびしまコンシェルジュとして、観光ガイドやツアーの運営をしています。森の中には遊歩道が整備されていて、とても気持ちよく歩けます。

島めぐりの後は、再びとびしま総合センターに集合し、地元の方との交流会。合同会社とびしまで企画・デザインを担当され、社外でも活躍されている松本友哉さんが、「飛島に関わる人を全国各地にたくさん作り、その人たちとつながって、飛島の未来を作っていこう」という発表をしてくださいました。松本さんは山口市出身で祝島を訪ねて来られたことがあります。松本さんの先進的な考えは非常に参考になります。松本さんの後に、飛島診療所で看護師をされている時松緑さんのお話。飛島診療所には、かつては常駐の医師がおられたようですが、現在はテレビ電話での遠隔医療と、週末のみ本土の病院から医師が派遣されるという体制とのこと。看護師は2名常駐されているとのこと。訪問看護も行っているとのことでした。

夕方から、沢口旅館で地元の方々



海岸の遊歩道を歩く



集落内を散歩

と懇親会。この旅館の女将は、島にUターンされた渡辺陽子さん。彼女も合同会社とびしまの社員です。これだけ大人数の料理

を準備するのは大変だったろうなあ・・・と思いながら味わいました。

翌朝、朝食前に島の集落を散歩しました。ここもやはり空き家が多く、今は営業していない旅館や民宿の建物も多く見られました。朝食の後、再び小川さんのガイドで島内巡り。海水浴場や海岸の遊歩道などを歩いて回りました。整備された遊歩道や海水浴場、レンタル自転車もあり、酒田市も飛島の観光には力を入れているように感じました。定期船待合所には、売店や食堂もあり、ここも合同会社とびしまの若者が運営しているようです。

島で活躍する若者たちが大漁旗で見送りをしてくれる中、帰りの定期船が出航。帰路は海も凪いで、デッキ上で快適な船旅を満喫しました。飛島の平べったい島影が徐々に小さくなり、今度は本土側の名峰・鳥海山が近づいてきました。

酒田港に到着した後、昼食は「SAKATANTO」というフードコート兼イベントスペースで、おにぎりを食べました。日曜日ということもあって、すごく混雑していたのですが、びっくりしたのは、精算が電子マネーだけで、現金が使えなかったことと、それ以上に驚いたのは、この大規模な施設を合同会社とびしまの子会社が運営していることです。飛島の中だけでなく、島外でも

活躍する彼らは、すごいと思います。祝島でも、こういうことができたらいいなあ・・・と思いました。



遠ざかってゆく飛島の島影

## 山田イサオ写真館(23) 『二人』

山田 イサオ

このコーナーでは、写真家で祝島ネット21会員の山田イサオさんの写真を毎回1枚紹介しています。山田イサオさんはモノクロ写真にこだわり、祝島では人物を中心に撮影をされています。

### 『二人』

お盆の暑い日の午後、  
帰省したカップルでしょうか？  
仲の良い二人に出会いました。

撮影日 不明

※山田イサオ写真館は、今回で終了となります。山田さん、長い間ありがとうございました。





5月の連休は、観光のお客さまよりも祝島出身者の帰省が多かったように思いましたが、6月に入って、観光に訪れる団体も増えてきました。団体のお客様たちは、大抵、10:30の昼便で着かれ、12:30発まで2時間ほどの滞在です。丁度くにひろストアの開店中ではあるのですが、せっかく祝島を訪れる方々の思い出作りのために、そういう日は、くにひろストアをちょっとばかり臨時休業として練塀ガイドツアーを行っています。



団体さんのガイドツアーは港からスタート

6月初め、2泊3日の団体旅行の初日に祝島を訪れた12名+添乗員さんの中には、BS放送にわたしたちが出演したのを見てくださった方もいらっしゃいました。先頭の店主が楽しく説明し、興味津々なお客さまの質問に答えながら、練塀ガイドツアーで集落内を巡る間、最後尾のわたしは副班長さながら人数確認をしつつ、和気あいあい歩きました。諸事情により、現地で祝島びわが購入できないと知ったお客さまが、とってとっても残念がられたので・・・タイミングよく冷蔵庫にあった「くずびわ」から、なんとか良さそうなのを13個選り出して、くにひろストアの前の井戸端で休憩中に食べていただきました。近所の方にいた



お客さんからいただいたストラップ だけで、みなさ

ん喜んでおられたのでホッ！びわを食べ終わったお客さまの中の1人から、「びわ色だから」と、可愛い人形ストラップをいただきました。またご縁がありますように！



約40名のバスツアーのお客さん

6月後半にも、コロナ禍では中止になっていた恒例の日帰りバス旅行が4年ぶりに復活。土日それぞれ40名ほどの御一行様が祝島を訪れ、練塀ガイドツアーを行いました。またも、臨時休業続きで、お店のお客さんにはちょっと迷惑を掛けましたが、「あんたらが、忙しいのや」「あんたらが、やりて（すごく頑張ってるような意味）や」と笑ってくれて、ありがたいことでした。

ところで、最近また島の人口が減ったようで、280人程だとか。くにひろストアから浜まで出る道筋に22軒くらい家がありますが、普段住んでいる家は4軒ほどになってしまいました。お店によく来てくれてた同級生のおじちゃんもこの夏、施設に入所しました。ポーロや豆煎餅が好きなおじちゃん、いつもいっぱい頼まれて仕入れてたのですが、ポーロを買うお客さんはちらほら。豆煎餅に至っては、だれも買わず・・・そもそも硬い煎餅系のお菓子を買う人は減多にないのです。「やおい（やわらかい）のをくれんさい」と言うお客さんばかり・・・。売れ筋でなくなったものは徐々に在庫整理。売れるもの、というか、みんなが欲しいものだけを仕入れなければならなかった昨今。仕入れた商品が余ってばかりだと、すべて自家消費・・・くにひろストアもピンチです。

この春から何でもかんでも値上げされ、否応なく、



くにひろストアでも徐々に値上げせざるを得ない状態です。卸屋さんからの伝票にも、「値上げ」の文字、月に2回買い出しに行くたびに、商品の値段が、10円、20円とはいえ、毎回値上がりしていてビックリでした。卵に牛乳、パンも、粉ものも、みんなの好きなアイスも・・・申し訳ないなあと思いつつ、この夏は値上げに踏み切りました。頑張っ値上げしてないのは、惣菜部のおかず・・・据え置きが続くように工夫しています。

酷暑の夏、やはり人気はアイスクリーム。中でも、バニラモナカがダントツ人気！いろんな種類のアイスを生入れてみても、結局はモナカから品切れになってしまうのですが、「暑い、暑い」「ぬくうて（温くて）やれん」といいつつ冷凍庫を探って、モ

ナカがなければ「はあ、なんでもええ」と、結局、アイスの引き出しは空っぽ！売り切れ状態を避けるために、一度にたくさん欲しいお客さんや、特定のアイスが欲しいお客さんには、予約を聞くようにしてはいるんですが・・・。嬉しい悲鳴の毎日でした。

9月になっても暑い日が続いて、アイスクリーム熱はまだまだ冷めやらぬおばちゃんたち・・・今しばらく冷凍庫にアイスクリームは欠かせない！と思いきや・・・10月に入っていきなり涼しくなって、いえいえ、それを通り過ぎて朝晩は寒いくらいになってしまいました。もうアイスクリームの仕入れは半分もいらぬね、と店主と笑いました。

ここで一句。

秋本番、今度は何が 売れるやら～

## 絵つき一覧覧会(40) 『船着場へ続く道』

エッキー浴野

これは練塀に挟まれた小道から見た当時の波止場と海です。

この絵を描いた2010年当時の定期船の発着所は光明寺のすぐ前でした。

今（2023年）ではここより東の方の新しい波止場に待合所も新しくなっていますね。

定期船の入船出船どき。

出迎える人、見送る人。

帰ってきた人、去りゆく人。

人々の顔や笑顔や話し声や笑い声・・・

船長さんや乗組員さんや切符売り場の職員さんや・・・

さまざま思い出されて懐かしいです。



「船着場へ続く道」 パステル画 B2サイズ

## 祝島旅行記(6) ～ 25年目の墓参り ～

岸本 佐知子

久しぶりの『祝島旅行記』シリーズは、この夏に祝島に来られた松岡家一行の皆様を代表して、岸本佐知子さんに書いていただきました。

こんにちは。東京で翻訳業をしている岸本佐知子と申します。

この八月に、母方の親戚一同が祝島に集結し、皆で墓参りをしました。母方の松岡家の墓が島にあるのです。私が祝島を訪れるのはこれで二度め、前回は二十五年前でした。九州に住んでいる母の姉が随筆集を自费出版し、そのお祝いという名目で皆で島に集まり、ふだんなかなか機会のない墓参りをしようということになったのです。

二十五年前、屋根のない小さな船で潮風を浴びながら数時間揺られて着いた島は、想像どおりののどかな土地でした。何年かに一度開かれる大きなお祭りのときは大勢の人が里帰りして賑やかになる、と以前テレビで観ましたが、その年はそれも無く、ハンガーにひっかけて吊るされた蛸が海辺で静かに揺れていました。

宿に集まった十数名の親戚は休憩もそこそこに(全員せっかちなのです) さっそく墓参りに出かけました。小高い丘をゆるゆるのぼりながら道端のユリを摘み、着いた墓地は海を見下ろす絶景ポイントでした。お墓を掃除しそれぞれに手を合わせ、そのとき自分が何を先祖にお話ししたのだったか、「初めまして」だったか「いやーいいところにお住まいですね」だったか、それとも「これからもどうぞよ



「民宿くにひろ」にて (右から3人目が筆者)

ろしく」だったのか、どうにも思い出せません。

さてそれから二十五年後の今年。九州や東京や埼玉や仙台からまたも私たちは祝島に集まりました。今年九十三歳になる私の母が最近事あるごとに「もう一度祝島に行きたい」と言うようになったことがきっかけの一つでした。

当然のことながら、二十五年前と今とではいろいろなことが変わっていました。吹きさらしの小さな船は立派な高速艇に変わり、柳井の港から島まではほんの一時間ほどでした。私たちの顔ぶれも変わりました。前回の主役だった九州の伯母は今年九十八歳で無念の不参加、おじおばの幾人かはあちら側に渡ってしまい、その代わりに孫世代の配偶者や子どもが新たに加わって、人数的にはさほど前と変わっていません。

着いたその日に「民宿くにひろ」のご主人に島を案内していただきました。こんなに美しい練堀があることも、猫天国と呼びたいくらい猫がたくさんいることも、家並みや小学校の校舎の味わい深いたたずまいも、初めて見るような驚きで、いったい二十五年前の私は何を見ていたのだろうと不思議でした。

翌日の午後がメインイベントの墓参りでした。前回はゆるゆる上った道が土砂崩れて通れなくなったため、けっこうハードな上り坂でした。母にお留守番してはどうかと説得を試みるも「絶対に行く！ 私は歩ける！」の一点張りで交渉決裂。しかしいざ上り坂が始まると、ものの数十歩で「やっぱり無理」となり、こんなこともあろうかとかねて用意の車椅子をみんなで交代で押す羽目となりました。あとでその時の写真を見ると、体をほとんど地面と平行に倒して車椅子を押し上げる自分の姿は、まるで奴隷か苦力(クーリー)のようです。

その坂の途中から墓地に下っていく脇道がわからずうろろうろしていると、バイクが横にキッと停まって「墓参りかい？ 松岡家？ ああ知ってる、案内したげるよ」。声の主、タミさんの先導で分け入った先は、密林のごとく鬱蒼とした森の中をうねうねと続くワイルドな細道で、母もやむなく車椅子を降り、私たちの肩につかまりながら危なっかしく進みました。



そうしてやっとたどり着いた墓地は、二十五年前と変わらず素晴らしい場所でした。皆で汗だくになりながら草を刈り、シキミと線香を供えてめいめいお参りしました。墓参りがこんなアドベンチャーになるとは思いも寄りませんでした。そのぶん嬉しさもひとしおでした。母がどんな気持ちで手を合わせていたのか、でもきっと満足したことでしょう。

行者様の祠に登り（これがまた墓参りを上回る冒険だったのですが）、澄んだ海に足をつけ、港の「岩田珈琲店」で自家焙煎の美味しいコーヒーを飲み、島の生き字引の橋部さんのお話を聞き、三日間はあっという間に過ぎました。船に乗るまぎわ、去りがたい気持ちでポケモンをジムに入れました。

それから一か月近くが経ちますが、そのポケモンがまだ帰ってきません。どうやらよほど気に入った

ようです。なんだか私の分身が島にいてくれるようで、嬉しくてときどきスマホを開いては、まだそこにいることを確かめています。



お墓から見える景色はすばらしかった

## 祝島自由律俳句(12)

山口県防府市出身の俳人・種田山頭火。彼の作った俳句は、五七五の定型にも、季題にもとられない自由な表現が特徴の自由律俳句といわれています。このコーナーでは、読者の皆さんから「祝島」をテーマにした自由律俳句を投稿していただき、毎回その中から何句かを紹介させていただいております。

石積みの石は時なり月渡る  
希少な海や田ノ浦天高し  
赫赫(かっかく)と島守のごと曼珠沙華  
篠崎 幸恵

コロナあけ久々に集う夏休み  
吉原 妙子

虫の音を星の声かと首傾げ  
星降る夜一瞬の風が吹き抜ける  
流星群指折り数えて願いごと

國弘 優子

客戻り島ネコが待つおこぼれの魚  
還暦過ぎ声は変わらぬ同級生

國弘 秀人

読者の皆様からの投句をお待ちしております。テーマは「祝島」です。応募は、メールまたは郵送にて、応募作品／作品についてのコメント（あれば）／名前（ペンネーム可）を記入して事務局までお送りください。メールのあて先は [haiku@iwaishima.jp](mailto:haiku@iwaishima.jp) です。



## お知らせ & 募集

### ■2024年版のカレンダーが出来ました

毎年恒例の「祝島カレンダー」2024年版が完成しました。会員の皆様に配布するとともに、例年通り、祝島の各家庭に1部ずつ配らせていただきます。

### ■月刊「趣味の山野草」に祝島の植物の記事が掲載されています

月刊誌「趣味の山野草」の中の「ウッチーのGreen Life」のコーナーに、祝島関連の記事が掲載されています。2023年5月号には、よもぎ杖やココーの話、9月号にはフウランの話が掲載されています。著者のウッチーさんこと内田祐介さんは、下関市の植物公園に20年務められた後、現在は北九州市の植物公園に勤務されています。祝島の植物に関心を持たれていて、これからも時々来島されることになっていますので、誌面に祝島の植物の話題が載ることがあると思います。本屋さんに行かれた時にはぜひチェックしてみてください。

### ■「アイランダー2023」について

11月18日（土）、19日（日）に開催される「アイランダー2023」。祝島ネット21では、今年は公式ホームページのみの参加を予定していましたが、今回から公式HPだけの参加は認められないとのことで、残念ですが、不参加ということになりました。



2024年版「祝島カレンダー」の表紙



月刊「趣味の山野草」5月号誌面  
よもぎ杖の話題。  
左下の写真がウッチーさん

## 編集後記

コロナによる規制が無くなり、夏休みやお盆、そして秋の連休も、帰省客・釣り客・観光客で島は賑わいました。そんな中、7月後半に遅ればせながら夫婦揃ってコロナに感染してしまい、大変な目に遭いました。今でもまだ後遺症で咳が出やすいような気がします。あとから考えれば、ちょっとした油断で、その時にマスク・手洗いの基本的な対策さえしておけば感染しなかったのではないかと、反省しています。皆さんも気を付けてくださいね。

さて、本文にも書きましたが、「山田イサオ写真館」のコーナーが、残念ながら今回で終了となりました。何年間にも渡って写真と記事を提供していただいた山田さん、ありがとうございました。また祝島に写真撮影に来られるようになりましたら、このコーナーを復活させてくださいね。お待ちしております。

夏の酷暑からやっと解放され、過ごしやすくなった今日この頃、「読書の秋」「スポーツの秋」「食欲の秋」と、それぞれの秋を堪能されていると思います。私は、「カレンダー作りの秋」「会報作りの秋」を堪能しました。(^^)

次号の発行は、もう来年の早春になります。どうぞお楽しみに！

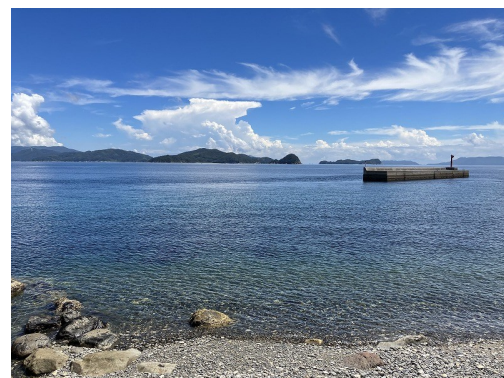
(編集長：國弘秀人)

※事務局では会員の皆さんからの投稿をお待ちしております。投稿はホームページからも

可能になっておりますので、ご意見・ご感想など、お気軽に投稿してください。

※祝島ネット21では随時会員を募集しています。会費は1年間6000円です。

入会ご希望の方は事務局までご連絡ください。



夏の海と空

祝島ネット21会報「いわいしま通信」第71号

発行日：2023年10月10日 (頒価400円)

発行者：祝島ネット21事務局

〒742-1401 山口県熊毛郡上関町祝島

ホームページ <http://www.iwaishima.jp/inet21/>